罪と魔法使い

駄猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
罪と魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ６９４８Ｄ

【作者名】
駄猫

【あらすじ】
現代に蘇る神と魔法使い戦い…すべては運命でありすべては……

プロローグ

古の昔、神は人を生み出し楽園へと住まわした、だが、人は一匹の蛇にそそのかされ、神との約束を破り、禁断の果実を口にした。

人は果実を口にすることにより、知恵を得る、それと同時に死の運命を架せられることになる　。

約束が破られたことを知り、神は人を楽園から追放した。

――ここまでは聖書が語る真実

人は智恵を得たことにより手にした力それは…魔法…神さえ予期せぬ力、人はその力を使い神の軍と戦ったその戦いは数百年続くが決着はつかなかった、数多の犠牲に悲しんだ神と人は契約を結び戦いを終わらせた。

その後、人は数百年の時と共に魔法を忘れていった、だが、一部の人々は魔法を手放しはしなかった、なぜなら神と人の戦いの影で楽園から逃げ出した者がいたそれは…蛇。

――これが俺の世界の真実

起こされ見習い魔法使い

「優李様、朝です、起きてください」

黒いスーツに白いシャツに映える黒いネクタイ。後ろで綺麗に縛られ纏めている少し長めの黒髪。　スタンドの光でエメラルドグリーンに輝く瞳。

見事なまでに執事な姿の青年が、机の上の本に突っ伏して寝ている主人を起こそうと肩を揺する。

「お…おはよう睦月」

いかにも眠そうな声で執事の起こす声に応える。ノロノロとを頭をを起こすと腕を大きく振り上げ、クキ、コキッと肩を鳴らすと腰までありそうな長い黒髪を掻き分ける。

本の上に突っ伏していたせいか額にくっきりと線が付いている。

「まったく…いくら最近暖かい日が続いているとはいえ、こんなところで寝ては風邪をひいてしまいますよ」

主人の間抜けな姿にあきれつつも、睦月は床に散乱した本や紙を拾い集める。

「ふぁ～…ところで今何時になる？」

主人の問い掛けに睦月は懐から出した懐中時計を開く。

「只今、八時五分になります」

「今日の予定は？」

「午前中は特に何もありませんが午後はクロムウェルからの依頼が一件と一般人から依頼が一件です。

淡々と説明する睦月によそに、主人はまだ眠いのかぼんやりとスタンドの明かりを見ている。

「優李様、聞いていらっしゃいますか？」

主人は睦月の声で我にかえる。

「な、何か言った？」

睦月は呆れた表情で深い溜息をつく

「優李様、少しシャワーでも浴びて目を覚まされてはいかがですか？」

睦月の提案に眠そうに頷くとノロノロと立ち上がり部屋を出ていった。

主人が部屋を出ていったのを確認すると、睦月は細くため息をついた。

辺りには開いたままの書物や、円の中に文字や記号の描かれた紙が散乱している。

睦月はその中の一枚を手に取る。

「汝、我が力に因りてその力を示さん」

睦月の言葉に反応するように紙に描かれた模様が光り、小さな竜巻が作り出した。

「ふむ術式の構成は良くできていますね」

指を鳴らす、すると竜巻は消え去った。

魔法、人が使う神秘の術、そして、その力を行使し、人を厄災から救う者、　それが魔法使いだと睦月は師に教わった。

睦月は数度目の溜息をつくと部屋をかたずけ始めた。

シャワーの音が響く。

降り注ぐ温かいお湯を無言で浴び続け不意にシャワーを止める、自然と深いため息が出る。

「使えない…」

睦月は言っていた。

――魔法とは人の心の力（魔力）を使い奇跡をなす神秘の術です、どんな人でもある程度なら修業をつめば使えるようになります。

しかし修業を始めてからもう三年も経つが、まだ一度も成功したことがない、本来なら成功しないにしても、何らかの反応があるは

ず、と睦月は言っていたが、その反応すら無い。

「どうして…僕は母様のようにはなれないの？」

鏡に向かって問い掛けるが答えはない。

虚しくなる不安になる、そんな思いを振り払うよに顔を左右に激しく振るがこの虚しいさや不安は消えない。

黒髪を軽く絞ると浴室の扉を開け、すぐ横の台に置かれているバスタオルに手をのばす。

体を拭き、髪を念入に拭くとタオルを巻いて浴室から出て洗面台の前に立ち、使い慣れたドライヤーの温風で髪を乾かす。

「どんな人でも修業すれば使えるか…」

ドライヤーを止め右手を鏡に伸ばす。

「母様…」

強く、優しく、美しい母様。あの日…あの夏の夜からずっと母様のようになりたいと思い、夢みてきた。

「ねぇ…僕だって…母様みたいになれるよね」

少年は、少女のような笑顔を鏡に映すと、来る途中自室に寄り用意した服に着替え、朝食を食べるため居間へ向かった。

騒がし朝の魔法使い

食後、睦月のいれた紅茶を飲みながら一息ついていると。

「おい小僧、今日暇か？」

ルナが紅茶に角砂糖入れながら質問してきた。

「別に暇だけど」

「なら後でわしの部屋に来い、拒否は許さん」

そう言うと紅茶を一口で飲み干し、返事も聞かずに居間を出て行ってしまった。

「えっ！？ちょっとルナ……まったく、強引なんだから」

まあ、ルナが強引なのは今に始まったことではないが。

再び紅茶を飲み始める。

「やっぱり睦月のいれた紅茶はうまいな」

睦月は皿を洗いながら顔だけこちらに向け。

「快徒様に喜んでいただければなによりです。ちなみに今日いれたのはフランボワーズと言う木苺の甘酸っぱい香りが特徴的な紅茶です」

そう言うと皿洗いが終わったのか、手を拭き、俺と向かい合う様に座ると自分のカップに紅茶を注ぐ。

「落ち着きますねぇ」

睦月は紅茶の香を静かに味わっている。

「嗚呼、至福の時だな」

睦月と俺はうっとりとしながら紅茶の甘酸っぱい香に浸ると。

ガシャン、パリ、パリン

突然、静寂を切り裂きガラスが割れる音が居間に響く。

「な、なんだ！？」

居間の中庭に繋がるガラス戸が割れ黒い固まりが五つ飛び込んできた。

「手を上げろ」

突然真ん中の一人がこちらに銃を向けお決まりの言葉を口にする、見たところ映画で見た特殊部隊によく似た格好だ、声の低さから見て男だろうか。

唖然としながら手を上げる睦月と俺。

「あのう、何か御用でしょうか？」

睦月は落ち着いた口調で銃を向ける男に話しかける。
「我々は主の命令により白陽快徒を捕獲、束縛します」
「なるほど、快徒様が狙いですか」
睦月が突然、話していた男の後ろに現れる。
「なに！？」
突然現れた睦月に五人の視線が釘づけになったその瞬間、俺は睦月に教わった歩法で真ん中の男に一瞬で間合いを詰め、鳩尾に肘を撃ち込む。
「グハッ」
腹を抱え込むように男がうずくまる。
「小僧、貴様！！」
右にいた二人の男が俺に銃を向けた瞬間、睦月の蹴りが二人を薙ぎ払い壁に叩きつける、それとほぼ同時に俺は左の二人の脚を蹴り払う、脚を蹴り払われ倒れた二人の男は起き上がろうとした瞬間、睦月と俺の蹴りを顔面に喰らい再度倒れた。
「ふうー、流石睦月、鮮やかだねぇ」
立ち上がり周囲を見回す、全員気を失っているみたいだ。
「いえいえ、快徒様こそ先程の踏み込みお見事でした」

睦月は乱れた髪とネクタイを整える。

「我が家の執事をものの十秒で戦闘不能にするなんて、流石快徒様ですわ」

女の声に驚き中庭に眼を向けた瞬間、俺の首に何かが巻き付く、それと同時に何か柔らかい物が口を塞ぐ。

「むがぁ！？」

そのまま俺はバランスを崩しその場に倒れた。

「快徒様会いたかったですわ」

茶髪のみつあみに空のような青い瞳、懐かしい少女がそこにいた。

「もひかひへまひな？」

「快徒様覚えていらしてくださったのね、そうですマリナ、如月マリナです！！」

俺の首に抱き着く手に力がこもる。

「まひな、くるひい」

少女の豊かな胸が俺の呼吸を止める。

「まあ、すみません」

マリナは慌てて快徒から離れる。

「ぷはぁー…、死ぬかと思った…」

大きく深呼吸をする。

「快徒様、大丈夫ですか？」

睦月が心配そうに俺を見ていた。

「すみません快徒様、私あんまり嬉しかったもので」

マリナはしょんぼりとしながら頬を朱く染める。

「いや…別になんともないから…それよりなんでマリナが？」

「えっ！？快徒様、何も聞いてませんの？」

口に手をあて驚くマリナ。

「俺は何も聞いてないけど、睦月は何か聞いてるか？」

「いえ…私は何も」

「おかしいですわね…クロムウェルから連絡があったはずなんですが…まあいいですわ、何も知らないなら私から説明いたします」

マリナは大きく深呼吸をする。

「白陽快徒様、私は貴方のガーディアンになるために来ました」

その場の空気が止まる、その時俺がどんな顔をしていたか俺にはわからない…ただあの冷静な睦月が驚き目を円くした顔を写真で撮っておくべきだったと思ったのはもっと後のことだ。

「ま、マリナが俺のガーディアン！？」

来客？魔法使い

「ついた…」

町外れ、かなりキツイ坂を登った森林、そこにそれは建っていた、空港に着いてここに来るまでに見てきた景色はここが日本だと実感させてくれたがこの場所は違った、ゴシック建築の古びた教会、日本の景色とは到底結び付かない異色の建物、そうまるでここだけが日本という国と切り離されているかのように。

「姉様、ここに兄様がいるの？」姉様と呼ばれた少女は、妹の声に振り返る。

空のような蒼い瞳、透き通る白い肌、栗色のボーイッシュなショートヘアーのどこか落ち着いた空気かもしだす少女。

「地図だとここ」

「やったー！！やっと兄様に逢えるんだ！！」

喜びに目を輝かせる少女、先程の少女と同じ栗色の髪、蒼い瞳、透き通るような白い肌だが、髪型だけが違いこちらはツインテールで先程の少女に似ているがこちらはまだ幼さが感じられる。

「……」

「姉様？」

「なに？」

無言で教会を見つめる姉にたいし、マリナはインターホンを指差し。

「早く、押してよ」

妹の呼びかけに反応し姉はゆっくりとインターホンに手を伸ばすがボタンに触れる寸前でその手は止まる。

「どうしたの？」

マリナは不思議そうに姉の顔を覗く、姉は静かに手を自分の胸にあて妹に向かって呟く。

「…マリナが押して…」

「えっ！？なんでぇ？姉様の方が近いんだから姉様が押してよ～」

「……」姉は無言でうつむく。

「もしかして姉様…恥ずかしいの？」姉の頬がうっすらと朱く染まる。

「姉様？今日から一緒に暮らすのに、こんなことで恥ずかしがってどうするの！？」

「で、でも…」両手の人差し指を合わせもじもじと恥ずかしがる。

。

「はぁ…そんなんじゃ兄様に嫌われちゃうよ」

「そ、それは嫌…」

「ならインターホンくらい自分で押すこと！！」

「わ、わかりました…」姉はゆっくりとインターホンに手を伸ばす。

鼓動が高鳴る、たかがボタンを押すだけ…ただそれだけなのに、いろんな不安が胸を過ぎる、優李はわたし…いやわたし達を覚えているだろうか？、もう好きな人はいるのだろうか？、いたら…いたらわたしは…。

ぐるぐると頭の中で言葉が回るなか容赦なく指はボタンに触れる。

カチ、ピーンポン

数十秒後

ギィー

建て付けが悪いのか酷く不気味な音をたてて扉の半分が開く、中から現れたのは疲れた表情の細身で背の高い執事姿の美青年だった。

「新聞ならいりませんよ…おや…？」

疲れた表情の執事は二人の少女を見るや少し固まり扉を閉める。

ギィー

数秒後、再度不気味な音をたて扉が開き現れたのは先程の執事である、だが表情は爽やかな笑顔に変わっている。

「ようこそお美しいお嬢様方、我が主の教会に何か？」

「あ、あの…その…わたし達……もらいに……」姉が何か言っているが…声が小さいうえに震えているため隣にいるマリナにさえ聞き取れない。

「あのう、できればもう少し大きな声でお話ししていただけませんか？」

「あっ、はい…わたし達……もらいに……」姉の声はさらに小さくなる。

「姉様ちょっと避けてね」マリナは姉と執事の間に割り込む。

「こんにちは～！！わたし、如月マリナです！！こっちはアリス姉様、早速なんですけどわたし達をここで雇って下さい」

執事は少し考え込む。

「ねぇ…やっぱりいきなりは無理なんじゃ…」アリスは不安げにマリナの耳元で囁く。

「いいですよ」

アリスは執事の言葉に耳を疑う。

「貴女達を雇いましょう」

「やったね、姉様」

マリナがアリスに抱き着くなか、アリスはただ呆然とした顔で執事を見ている。

「それではお入り下さい」

執事はドア大きく開き中へと誘う。

「姉様、入ろう！！」

アリスはマリナに手を引かれがままに扉をくぐる。

「わぁ～！！すごい綺麗」

「……」

二人を迎えたのは幻想的なまでに美しい光景だった。

一枚の巨大なステンドグラスから七色の光の線がいくつも天井を埋め尽くす、まるでいくつもの虹が空を埋め尽くしたかのような光景にマリナははしゃぎまわりアリス言葉も忘れはみとれた。

「貴女方は運が良い、この光景は天気の良い日に稀にしか観られない物です」

数秒後、光の線は溶けるよう消え古い汚れた天井が現れる。

「え～、もう終わり？」マリナは不満げな声をあげる。

「はい、これで終了です」

「じゃあじゃあ次はいつ見れるの？」

「さあ…明日か明後日か、はたまた一年後か、まあそんなことよりこちらへ」マリナの質問に執事は曖昧に答えると右の通路へ進む。

マリナとアリスは執事の後について行く。

通路は教会と同じ石造りで天井に等間隔で日窓ついている。あちこち蜘蛛の巣がはっているのをみると余り掃除はされていない様だ。

キィー

執事はところどころ錆び付いた鉄製の扉を開く。

「ここから先は足元が暗くなりますのでお気をつけ下さい」

扉の先は地下へと続く真っ暗な階段、唯一左右に小さな松明が等間隔で暗闇を照らしている。

「姉様、こうゆうの苦手だよね…？」

「だ、大丈夫…」

アリスは表情こそ変わらないが足が小刻みに震えている。

学問、運動、料理、茶道、花道…言い出したらきりがないが姉様はそのどれも見事なまでに完璧にこなす完璧超人だ、だが弱点が二

つ、一つは先程の様に人とのコミュニケーションをとるのが以上なまでに下手なことそしてもう一つが…閉所恐怖症。

「どうかなさいましたか？」

「な、なんでも…あ、ありません…」アリスの声が細く震える。

「姉様、ファイト！！」マリナはアリスの耳元でそう囁くと執事の後についていく。

「あっ…待って…」アリスは恐るおそるマリナの後に続く。

その後3分ほど階段を降りると入口によく似た鉄製の扉が現れる。

「着きました」

執事は扉を開く、明るい陽の光が薄暗い通路を満たす。

「眩しい…」

マリナとアリスは目を細めながらゆっくりと扉をくぐる。

目の前に現れたのはま新しい屋敷だった。

「ここに兄様がいるんだね」

「……」

マリナは姉を見る。

先程インターホンを前にした時と同じ様にうつむいてもじもじしている。

その様子にマリナは心の中で呟いた「駄目だこりゃ…」

そんな二人をよそに「さあ、お屋敷へ参りましょう」執事は屋敷のほうへと歩きだした。

一方、時間は少し戻る。

睦月が出ていたばかりの居間で少年が一人。

「い、生きてますか？」

睦月に倒され気絶した黒い特殊部隊の格好をした人間の一人をつつく。

シュー

「は、はわわわ！？」

突然つっついた人間から朱い煙が噴き出す、それに連鎖して他の四人からも同色の煙が噴き出す。

「ゲホ、ゴホゴホ…な、何これ…」

数秒後、朱い煙は徐々に薄くなり空気に溶け込むかのように消えた。

「あ、あれ…？消えちゃった？」

先程まで気絶し目の前に倒れていたはずの五人が見当たらない…。キョロキョロと周囲を見回す。

「うん？」

足元に白い人の形を模した紙が落ちている。

「これって…式神…？」

先週の日曜日、睦月の授業で教わったことを思い出す。

「わたしたち魔法使いは基本的には心の力、つまり魔力を行使し自然、心など操ることができます、または難しいものになると次元や魔力そのものを操ることも可能です。このなかでも自然はもっとも扱いやすい物の一つです、ちなみにそのなかでも一番扱いやすいのはゴーレムを作り出し使役する魔法です、この魔法は錬金術の応用でもありますがとても扱いやすく簡単な物なら失敗することはありません。基本的には無機物に術式、術者の肉体の一部を埋め込み魔力の糸（パス）を繋ぐことで完成します。日本では式神という生き物の形を模った紙に髪の毛を縫い込み魔力で実体のある幻を造り出すという少し高度なものです」

「実体のある幻覚？」

「はい…触れることの出来る幻なのですがこれは理論的に説明するのはとても難しいので後日実物をお見せしたうえで説明をしてさしあげます」

その日はそこまででその授業は終わった…。

優李はまじまじと観察するが何も知らない自分には本当にこれが式神かわからない。

「ルナにでも聞いてみようかな」

紙を拾い集め居間を出る。

「にゃ～」かわいらしい鳴き声と共に額に三日月ハゲの黒猫が優李の足に絡みつく。

「やあ、月千代」優李は三日月ハゲの黒猫を抱き上げる。

「ルナにご飯は貰ったかい？」

「うにゃ～ぉ」この鳴き声はＹＥＳと言う意味だ。

「そうかそうか、これからルナの部屋に行くけど一緒にいくかい？」

「うにゃ～ぉ」月千代はさっきと同じ声で鳴く。

「それじゃあ、約束の時間より少し早いけど行こうか」

この屋敷の北にあたるのが居間である、ルナの部屋は逆の南廊下を進んだ一番奥の右の部屋である。

優李はルナの部屋の前に到着する。

コンコン

「ルナ、僕だけど入るよ？」

ドアを開き中に入る。

「いつ来てもやっぱり慣れないなぁ…」

周りは普通の草木から見たこともない奇妙な草木が生い茂りまるでジャングルのようだ。

「にゃ～」

「ど、どうした？」

優李に抱かれ大人しくしていた月千代が突然モゾモゾと暴れだし腕の中から跳び出し綺麗に地面に着地したかとおもったら、そのまま一目散にジャングルに消えて行った。

「はぁ…ここに来るといなくなるんだから」

いつもここに来ると月千代いなくなる、一度檻に入れて連れて来たこともあったが結果は……檻大破。

月千代はほっとこうそれよりルナは何処だろう？、鍵が開いてたからいるはずだけど…。

優李は草木の中に一本だけのびた道に入る、見た感じは獣道だがここに道を作るような大きな動物はいない、ルナや僕や睦月が毎回通ってできた人間の道だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6948d/

罪と魔法使い

2011年10月4日18時04分発行